社会科

教科領域研究テーマ

【社会にふみだす「知」の形成
～学び合い，互いに考えを広げ深める学習活動を通して～】



社会にふみだす「知」の形成

～学び合い，互いに考えを広げ深める学習活動を通して～

実　践　者　西田　剛志，田中　寿佳，宮本　真人
愛媛大学研究パートナー　鴛原　　進，川岡　　勉，川瀬久美子
張　　貴民，中曽　久雄，福田　喜彦
森　　貴子，矢澤　知行

第１章　はじめに

社会にふみだす「知」とは，子どもたちが国家・社会の形成者として基礎的・基本的な知識，概念や技能を獲得し，様々な人や事象と関わりながらよりよい社会の形成に主体的，創造的に取り組もうとしたり学んだことを活用したりしていこうとする資質や能力，意欲や態度を示している。これを育成するために，次の二つの点を中心に研究・実践を進めることとした。

１　問題解決的な学習の充実

これまでも，問題解決的な学習過程を柱とし，社会的な見方や考え方を成長させるために，教材を工夫したり，問いの質を向上させたりするなどして，生徒が単元を通して強い問題意識をもって主体的に問題解決に取り組むよう単元構成や学習指導方法を工夫してきた。昨年度においても，多面的・多角的に追究させることのできる問題解決的な学習を展開し，公正に判断する能力や態度の基礎を養うことができた。本年度はさらに，「育てる」から「育つ」への指導観の転換を図り，身に付けた知識，理解，概念等を生徒が活用し，生徒自身がもっている力を引き出して問題解決に至ることができるような学習展開を工夫していきたいと考える。

２　生徒どうしの学び合いの充実

社会科の究極のねらいは公民的資質の育成であり，独りよがりの判断ではなく，社会的事象を多面的に捉え，より公正性や妥当性を重視して思考，判断する力が必要であると考える。自分とは異なる見方や考え方をもつ人との学び合いを通して，自分の考えを再構築したり，見方や考え方を広げたりする経験の積み重ねが大切である。これまでも各自の学習成果を可視化し，それを互いに活かし合える学習活動の充実を図り，その効果が実証されている。さらに，生徒どうしの関わり方を「３つのきょうどう」の精神を意識してコーディネートすることで，社会にふみだそうとする原動力となる自尊感情を高めていきたい。

以上の二点を中心に，各分野で次のようにテーマを設定し，学習活動を工夫した。

地理的分野……広い視野から社会を捉える社会科学習の展開
歴史的分野……社会のつながりがわかる社会科学習の展開
　　社会が「分かる」社会科学習の展開

第２章　研究の実際

研究（その１）

広い視野から社会を捉える社会科学習の展開
―地理的分野　世界の諸地域「南アメリカ州」の実践より―

（実践者）西田　剛志

１　研究テーマ設定の理由

今日的な課題である「持続可能な社会の形成」に向けて，社会の形成者である私たち一人一人が現在の社会の姿を的確に捉え，よりよい未来社会を予想し，その形成に向けて社会参画していくことが求められる。社会的事象そのものを学習対象としている社会科は，「国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」ことを目標としていることからも，「持続可能な社会の形成」において重要な役割を果たすものと考える。このうち「空間」的に認識することが求められる地理的分野の学習においては，生徒に自分を取り巻く世界，我が国，そして身近な地域を，また現在のみならず過去から，そして未来へと，社会の形成者の一人として広い視野から社会を捉える態度を養うことは，「社会にふみだす知」として「持続可能な社会の形成」のために社会参画していく上で欠くことができないと考え，本研究テーマを設定した。

一方，一昨年度までの研究から生徒がより主体的に追究するためには，学習問題の設定や授業の展開を生徒の思考や意識の流れに沿うものとなるよう，更なる工夫が必要なことが分かった。また当該学年の生徒は，昨年度当初の研究実践で言語活動を充実させるために小集団学習やコミュニケーションボードを用いた学習を行った結果，「自分が作成した資料は，他の班員に活かされたと思う」という，自己有用感を感じている生徒が多く見られた。また，一つの事象を明らかにするために個々の生徒に課題を設けさせるなど複数の視点から追究させた結果，「広い視野から世界の諸地域を学習することに役に立ったと思う」という社会的な見方や考え方の成長が見られる生徒が７割以上見られた。本研究実践においても，お互いが協働学習者として追究する場面を設定し，生徒の追究成果やそれが活用され学習が深められている姿を可視化することにより，生徒の社会的な見方や考え方を成長させるとともに自尊感情を高めたいと考えた。

そこで，「自立」と「共生」との関係から次の２点を「研究の内容と方法」とし，地理的分野の学習活動を通して研究実践することとした。

ア　問題解決的な学習の充実
　広い視野に立って社会的事象に主体的に向き合い，社会的な見方や考え方を広げ深められるよう，学習問題を追究させるためにさらに個々に追究課題を設けさせるなど，学習展開の工夫をする。

イ　生徒どうしの学び合いの充実
　お互いが協働学習者であることを前提にして，社会的事象を説明したり，自分の解釈を加えて論述したり，意見交換したりするなどの言語活動を充実させるなどの工夫をする。その際，コミュニケーションボードを活用して自他の見方や考え方の可視化を図る。

２　研究の実際

(1)　単 元 名　　世界の諸地域「南アメリカ州」

(2)　本単元と研究テーマとの関連

本単元は，世界の諸地域の学習として南アメリカ州を扱ったものである。この州の地域的特色

を大観させた後に設ける主題を，「アマゾンの開発と環境保全」とし，アマゾンの森林伐採の実態や農地の拡大，バイオ燃料をめぐる政策や人々の動きに迫らせた。これにより人々の生活の様子を的確に把握させ，課題を追究する学習活動を通して地域的特色を理解させることを主なねらいとした。その過程で，アマゾンの森林伐採について開発か環境保全かを問うことで様々な視野から多面的・多角的に捉えさせることができる。また，地球規模の環境問題にもつながることから，世界的な視野で捉えさせることもできる。さらに近年の環境問題への意識の高まりから，生徒の生活実感からもこの問題に迫らせることができる。以上のように，ブラジルの開発と環境保全を広い視野に立って空間的に認識させながら考察させることは，持続可能な社会の実現に向け，社会の形成者の一員として広い視野から社会を捉える態度を養う上で重要であると考えた。

(3) 単元目標

観　点	目　　標
社会的事象への関心・意欲・態度	○南アメリカ州の地域的特色に対する関心を高め，それを意欲的に追究し，捉えようとする。
社会的な思考・判断・表現	○南アメリカ州の地域的特色を開発か環境保全かを世界的視野から，また，多面的・多角的に考察し，その過程や結果を適切に表現できる。 ○追究成果を基に，考察した結果を級友に説明したり，級友から新たな意見を得て自分の考察に生かしたりすることができる。
資料活用の技能	○地球儀，地図，主題図，統計資料，携帯情報端末などから問題解決に有用な地理的な情報を適切に選択し，主題図や文章として整理することができる。
社会的事象についての知識・理解	○南アメリカ州の環境問題とその対策についての追究を通して南アメリカ州の地域的特色を理解し，その知識を身に付ける。

(4) 指導計画

次	学習内容	◇評価規準（観点）	時間
1	南アメリカ州の多様な自然環境 南アメリカ州の歴史と文化 変化する南アメリカの農業と工業	◇南アメリカ州の地理的事象から人々の生活に興味をもち，地域的特色を見いだそうとしている。（関心・意欲・態度） ◇南アメリカ州に関する地理的事象について資料を活用して情報を収集し，自分なりに解釈して白地図に整理し，表現することができる。（資料活用）	2
2	アマゾンの開発と環境保全	◇追究に有用な情報を級友に説明したり，級友から新たな意見を得たりしながら，開発と環境保全について世界的な視野から捉え，多面的･多角的に考察することができる。（思考・判断・表現）	3
3	単元のまとめ	◇追究を通して南アメリカ州の地域的特色を理解し，その知識を身に付けている。（知識・理解）	1

(5) 指導の工夫

本年次の「問題解決的な学習の充実」「生徒どうしの学び合いの充実」を目指した研究を推進した。前述の１の「研究の内容と方法」に即して指導の工夫について述べる。

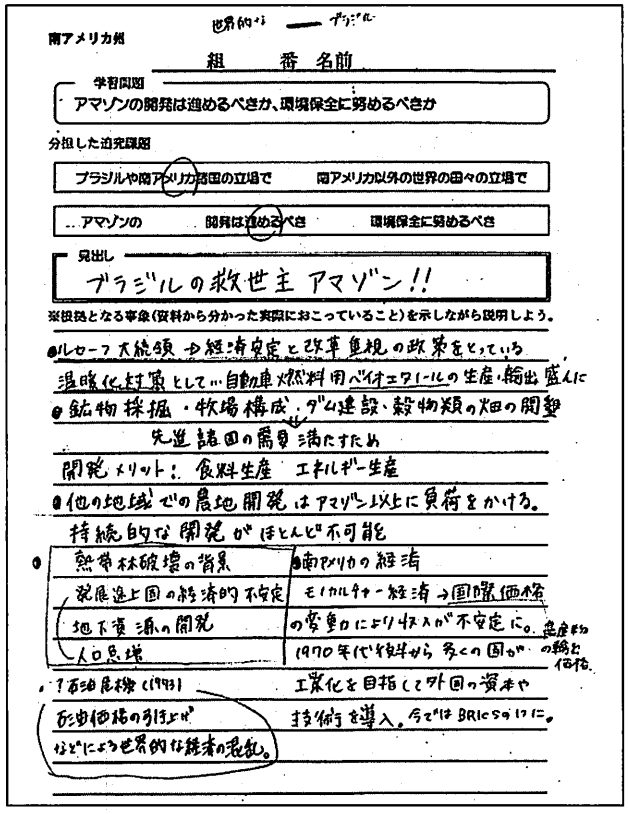
ア　問題解決的な学習の充実

南アメリカ州に対する興味をもたせるとともに世界的な視野から見させるために，写真資料や情報携帯端末を用いた地図資料などを提示した。ここから導き出された生徒の気付きや疑問を整理し学習問題をたてた。これに対し生徒にまず判断させる（**資料１**）ことにより，学習意欲の喚起を図った。そして，社会的事象を多面的・多角的に捉えさせ，社会的な見方や考え方を深めさせるために，個々に追究課題を分担させた。その際，アマゾンの森林伐採について，開発か環境

保全かという視点を中心に，ブラジルの労働者の生活，森林保護，食料の確保，鉱産資源の消費など，様々な視野から多面的・多角的に，更に，南アメリカ州以外に及ぼす影響という世界的な視野からも追究させた。

イ　生徒どうしの学び合いの充実

小集団学習においてお互いが協働学習者であることを前提にして追究させるために，個々の追究成果を持ち寄らせ，追究成果を根拠にして説明させたり，自分の解釈を加えて論述させたりする場面を設定した。その際，コミュニケーションボードを活用して自分の追究成果と他の視点から追究した生徒の追究成果を対比させることで，社会的な見方や考え方の広がりを可視化し，実感させるよう工夫した。なお，コミュニケーションボードとは，本校社会科では一昨年度から報告しているもので，生徒のコミュニケーションを促進するためのツールとしているものである。本研究実践では，Ａ３判クリアファイルの中に同じくＡ３判枡目入り工作ボードを入れて作成した。これに白地図や図，定型文などのフォーマットを挿入し多用途に使用している。


南アメリカ州　　世界的に ― ブラジル

組　番　名前

学習問題
アマゾンの開発は進めるべきか、環境保全に努めるべきか

分担した追究課題

ブラジルや南アメリカ諸国の立場で	南アメリカ以外の世界の国々の立場で
…アマゾンの	開発は進めるべき　環境保全に努めるべき

見出し
ブラジルの救世主 アマゾン!!

※根拠となる事象(資料から分かった実際におこっていること)を示しながら説明しよう。

●ルセーフ大統領 → 経済安定と改革重視の政策をとっている
温暖化対策として…自動車燃料用バイオエタノールの生産・輸出盛んに
●鉱物採掘・牧場構成・ダム建設・穀物類の畑の開墾
先進諸国の需要満たすため
開発メリット：食料生産　エネルギー生産
●他の地域での農地開発はアマゾン以上に負荷をかける。
持続的な開発がほとんど不可能

●熱帯林破壊の背景	●南アメリカの経済
発展途上国の経済的不安定	モノカルチャー経済→国際価格
地下資源の開発	の変動により収入が不安定に。
人口急増	1970年代(特に)から多くの国が
・石油危機(1973)	工業化を目指して外国の資本や
石油価格の引き上げ	技術を導入。今ではBRICSなどに。
などによる世界的な経済の混乱。	

資料１　生徒の気づきや疑問をもとに個々に追究させる

(6)　授業の実際（５／６時間）

ア　主題名

「持続可能な社会の実現について考えよう」

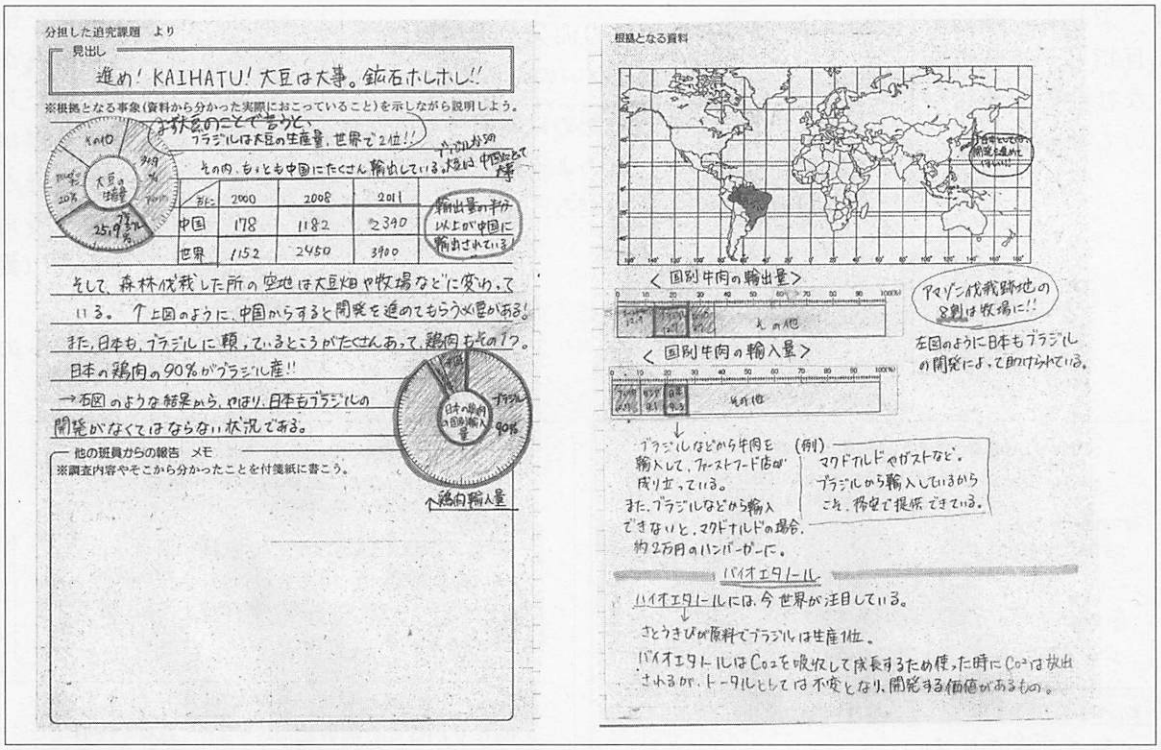
イ　ねらい

○小集団学習において，追究に有用な情報を級友に説明したり，級友から新たな意見を得たりしながら主体的に追究することができる。

○開発と環境保全について広い視野から考察することができる。

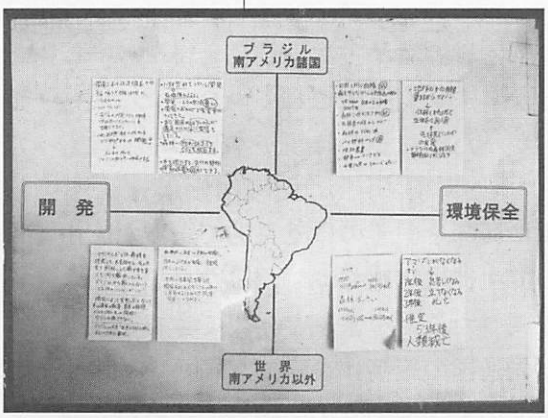
ウ　展　開

学習活動（形態）	○教師の働きかけ　・生徒の反応	○指導の工夫　◇評価(方法)
1　本時の学習問題を確認する。(一斉)	アマゾンの森林伐採の写真・航空写真バイオ燃料の生産の様子 理解確認課題：アマゾンの開発は進めるべきか，環境保全に努めるべきか	○生徒に学習問題を再確認させるとともに，広い視野から捉えさせるために，写真資料や航空写真を用いた。
2　開発か環境保全かについて，調査結果を共有する。 (小集団) ↓ (一斉)	○ブラジルの立場，世界の立場，さらに開発，環境保全の四つの視点から調査した結果を，根拠を示して報告しよう。 ・開発は，そこに暮らす人の生活が脅かされるのでやめた方がよい。 ・開発は地球温暖化や食糧不足を招くので環境保全に努めた方がよい。	○お互いの追究成果（**資料２**）をより有用なものにするために，根拠とともに説明させた。

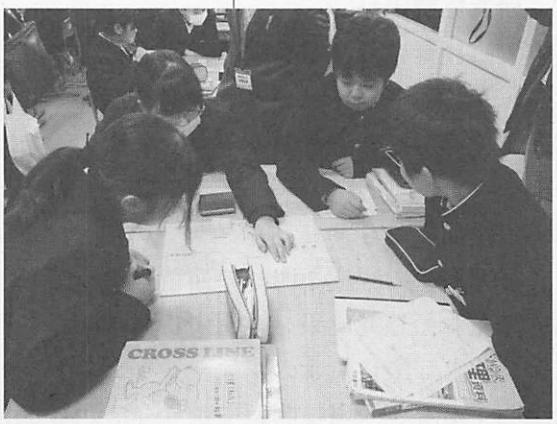


資料２　同じ追究課題で調べた他の班の生徒とともに，見出しをつけて一つにまとめた説明用資料

3　開発か環境保全かについて話し合う。（小集団） ↓ （一斉）	○追究した成果を持ちより，「アマゾンの開発は進めるべきか，環境保全に努めるべきか」を話し合おう。 • 開発には反対であるが，ブラジルの人の生活のためには必要。 • 環境を保全する方が，これからの地球のためによいのではないか。	○広い視野から社会的事象を捉えさせ判断させるために，小集団に各々の追究成果を持ち寄らせ（**資料３**），コミュニケーションボードを用いながら話合いをさせるなど見方や考え方の可視化をした。（**資料４**）



資料３　個々の追究成果を付箋紙に簡潔にまとめてコミュニケーションボード上に示すことで様々な視点で見ることを可視化する



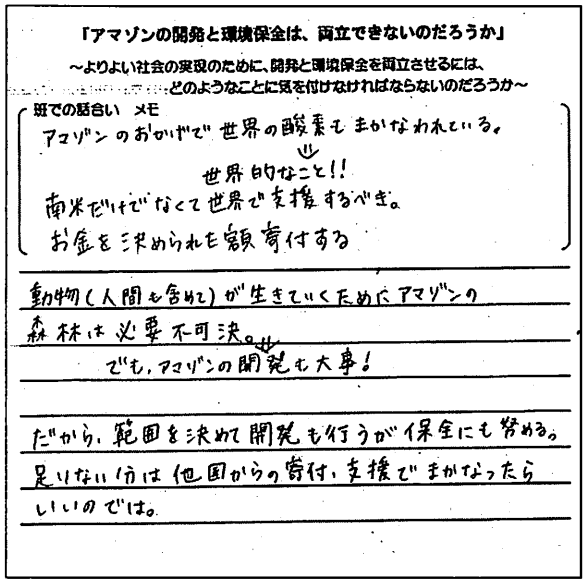
資料４　追究成果をコミュニケーションボード上でお互いが指し示しながら考えを深め合う様子

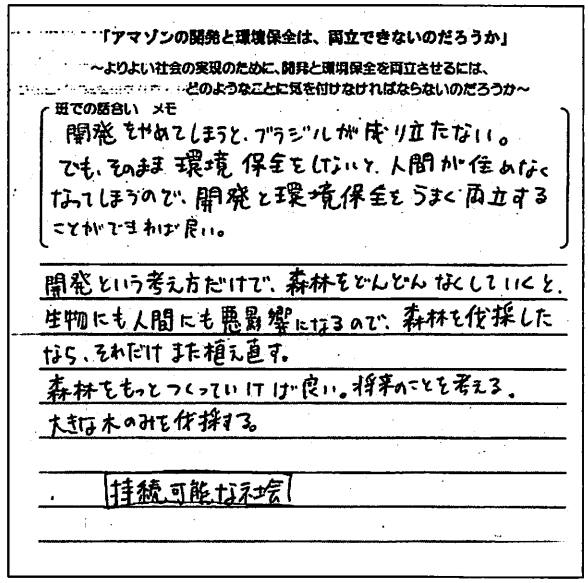
4　よりよい社会を目指し，持続可能な社会の実現について考える。
（個人）
↓
（全体）

理解深化課題	アマゾンの開発と環境保全は両立できないのだろうか

○よりよい社会の実現のために開発と環境保全を両立させるには，どのようなことに気を付けなければならないのだろう。

◇追究に有用な情報を級友に説明したり級友から新たな意見を得たりしながら，開発と環境保全を世界的な視野から捉え，多面的・多角的に考察している（**資料5**）。
（観察・ワークシートの記述）


「アマゾンの開発と環境保全は、両立できないのだろうか」
～よりよい社会の実現のために、開発と環境保全を両立させるには、どのようなことに気を付けなければならないのだろうか～
班での話合い　メモ
アマゾンのおかげで世界の酸素もまかなわれている。
↓
世界的なこと!!
南米だけでなくて世界で支援するべき。
お金を決められた額寄付する
動物（人間も含めて）が生きていくためにアマゾンの森林は必要不可決。
でも，アマゾンの開発も大事！
だから，範囲を決めて開発も行うが保全にも努める。
足りない分は他国からの寄付，支援でまかなったらいいのでは。


「アマゾンの開発と環境保全は、両立できないのだろうか」
～よりよい社会の実現のために、開発と環境保全を両立させるには、どのようなことに気を付けなければならないのだろうか～
班での話合い　メモ
開発をやめてしまうと，ブラジルが成り立たない。
でも，そのまま環境保全をしないと，人間が住めなくなってしまうので，開発と環境保全をうまく両立することができればよい。
開発という考え方だけで，森林をどんどんなくしていくと，生物にも人間にも悪影響になるので，森林を伐採したなら，それだけまた植え直す。
森林をもっとつくっていけばよい。将来のことを考える。
大きな木のみを伐採する。
持続可能な社会

資料5　持ち寄った追究成果や級友の意見を参考にして，様々な視点から問いに対する自分の考えをまとめようとした生徒のワークシート

3　成果と課題

(1)　研究協議より

本実践授業における公開授業での研究協議において，参観者から次の意見を得た。

○ワークシートで追究視点を明確にできており，分かりやすく工夫されていた。

○iPadを用いて熱帯林破壊の場所を探す活動は面白かったが，その時間が本時の中ではもったいなかった。

○導入場面での写真資料やグラフが，南アメリカ州に興味を引くのに効果的であった。中でも熱帯林の減少の程度を四国の面積と比較していたので生徒は実感しやすかったと思う。

○それぞれの追究成果を説明する際にとても細かく調べたことを堂々と発表できていた。

○温暖化と二酸化炭素の関係や，ファストフードと先進国の経済について，細かい数字をあげて説明するなど，環境問題や世界経済からが分かっていたようで，よく調べてあった。

○理解深化課題としては，「アマゾンの開発と環境保全は，両立できないのだろうか」よりも，「どのようにして両立させるか」であったと思う。

○何をもって生徒の理解が深まったと捉えるか，また，これをどう確認するのかを明確にするとよい。

○「持続可能な社会」について考える場面で，なんとなく分かっている生徒は多くいたと思う。調べたことを根拠に発言させたり，主語を入れさせたり，「私」の立ち位置を明確にしたりし

たほうがよい。

(2) 研究の成果

前述の指導の工夫に沿って研究の成果を示す。

ア 問題解決的な学習の充実

○南アメリカ州の地域的特色を理解させるための主題「アマゾンの開発と環境保全」は，開発行為が我が国の産業や経済，食などと関係していること，地球温暖化などグローバルな環境問題と自分自身の生活と関係していることなど，生徒の興味を引く学習課題を導くものとなり得た。そのため生徒は単元を通して意欲的な追究ができていた。

○設定した主題に対し始めに自分自身の判断を明確にさせてから追究課題を設定させたことで，意欲的に資料収集するなど，学習意欲を持続しながら主体的に追究できていた。

○様々な視点がある中で，小集団で分担させ追究させたことで，多面的・多角的に見て公正に判断する能力や態度の基礎を養うことができた。

イ 生徒どうしの学び合いの充実

○学習問題の解決のために自分で判断し選択した課題を追究させたことは，一人一人の追究が班全体の，さらには学級全体の学習問題の解決に必要であることを自覚させるとともに，学習意欲の喚起につなげることに効果があった。

○小集団において，追究成果を根拠にコミュニケーションボード上で指し示しながら説明し合わせた学習活動の可視化は，自分の学びが他者の学びに必要であるとともに，他者の学びが自分の学びに必要と感じさせた。また自分の学びの視点をより広く，そして深く確かなものにするために有効であることを生徒がお互いに感じることにつながったことから，自尊感情を高めるのに効果があった。

○小集団学習で生徒どうし，協働学習者として様々な視点から追究させた学習活動の可視化は，持続可能な社会について一面的ではなく，様々な面から考えをもつことができていたことから多面的・多角的に考察し判断させ，社会的な見方や考え方を養うのに有効であった。

(3) 今後の研究の方向性

本研究では，広い視野から社会を捉える態度を身に付けさせるために，問題解決のために個々に様々な追究課題を設けさせたり，その追究成果を持ち寄らせたりするなど，見方や考え方の可視化を目指した。その結果，多面的・多角的に社会を捉えることを身に付けさせることができた。また，その過程で生徒は，お互いに自尊感情を高めることもできた。今後もこれを継続していきたいと考える。もっとも，広い視野から社会を捉えさせる目的は本来，「持続可能な社会の形成者」としての資質を養うことにあった。例えば問題解決の過程でそれぞれが追究したことを持ち寄らせる際に，何らかの合意形成を図らせたり，行動化させたりするような活動を学習展開に組み入れることで，社会参画する態度を身に付けさせることも必要と考える。地理的分野の学習の最後に位置付けられている「身近な地域の調査」の学習で，上記の学習が展開できるよう研究推進に努めたいと考える。

研究（その2）

社会のつながりがわかる社会科学習の展開

―歴史的分野「近世の日本」の実践より―

（実践者）田中　寿佳

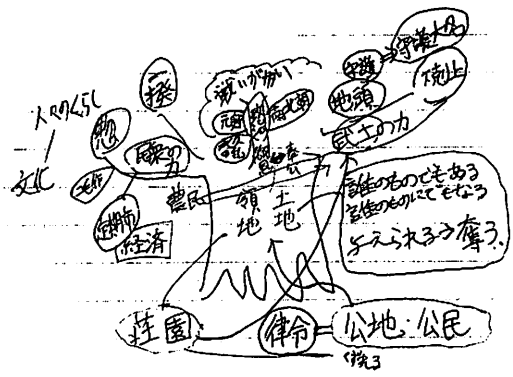
1 研究テーマ設定の理由

社会にふみだす「知」を形成するためには，社会やそこに生きる人々の現状や問題を適切に捉えることが必要であると考える。そのために，漠然とした見方では見えにくい社会的事象どうしのつながりや全体像を観るメガネとなる知識や概念，社会的な見方や考え方を身に付けさせたい。自分と異なる見方や考え方をもつ仲間との学び合いにより，見方や考え方が成長し，社会的事象間のつながりや時代の移り変わり，社会的事象の意味や意義が分かり，社会認識を確かなものにできると考え，本研究テーマを設定した。

2　研究の実際

(1)　研究の概要

歴史的分野の学習では，各時代の特色を明らかにした上で，歴史を大きく捉えさせることが求められている。一つの時代を特色づける核となるもの，言い換えると多くの社会的事象を貫く核となるものを通してその時代を見ていくことで，時代の特色が捉えやすくなるのではないかと考えた。右の図は前単元「中世の日本」のまとめの授業で，「領地・土地」を幹として中世を捉えたものである。本実践では，近世の日本の特色を捉えるために，近世社会が確立した時点で，核（以後，本研究では幹とよぶ）を生徒に見出させ，その幹との社会的事象の関わりを意識してその後の学習を進め，時代の特色を自分の言葉で表現させた。



「中世の日本」で捉えた幹のイメージ

(2)　指導の工夫

ア　問題解決的な学習の充実

(ア)　問いの設定の工夫
(イ)　思考の可視化の工夫

単元の始めに，近世のイメージを出させ，「近世は中世と同じく武士が政治を行ったのに，なぜ時代が区分されるのか，中世の幹であると考えた『領地・土地』とは違う近世の幹を見付けよう」という課題意識をもたせる。また，過年度の研究において，中世の社会的事象を見ていくための鍵として「領地」を見出させる活動を単元の始めにおこなったが，武士の政治の仕組みや領地という概念が理解できていないままの状態であったために，生徒の思考に沿うものにならなかったという反省から，今回は近世社会が確立した時点で近世の幹を見出させるようにする。近世の幹を見付けようという追究課題は，１つの視点に当てはまるだけでは幹を導いたことにはならない，多角的・多面的な考察を必要とする問いであり，その思考の助けとなるよう付せん紙やホワイトボードの活用を工夫する。

イ　生徒どうしの学び合いの充実（「協働」的な学びの充実）

(ア)　新たな考えを生み出す追究形態の工夫
(イ)　活動意欲や自己有用感を高める手立ての工夫

昨年度の研究では，古代の特色を捉える学習において，学習内容の焦点となる社会的事象を見出す際に，班員がそれぞれ選んだ事象とのつながりを考えた上で，結果的にその中からもっともよい事象を選ぶという展開であったために，新たな考えが生まれにくかったのではないかと考えた。そこで今回は，班員それぞれが異なる視点からまとめた近世社会の特色をつなぐ活動の後に，そのどの特色とも関わりのあるものを時代の幹として見出させる展開にする。このように一人一人に異なった視点を割り当てることで，個々の生徒が「班の中でこの視点についてまとめるのは自分だけであり，自分のまとめがなければ時代の幹を見出すことができない」という責任感をもってまとめ，伝えることができると考える。自分のまとめが他の班員のまとめとつながっていることや自分の学びが班の学びに生かされていることが実感でき，自己有用感が高まることも期待できる。

3　授業の実際

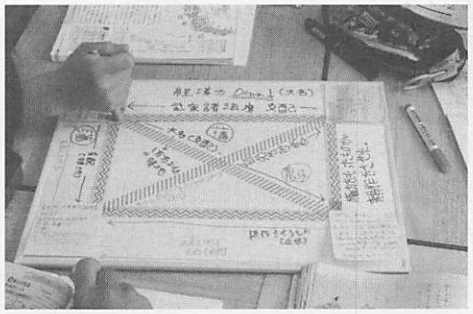
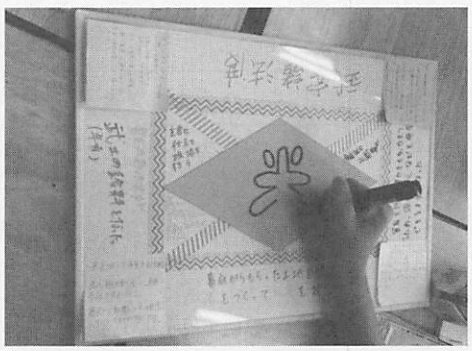
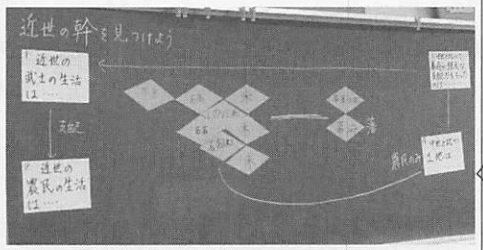
(1)　中世の幹を見出す授業の実践

ア　ねらい

江戸時代の社会の特色について異なる視点から班員がまとめたことや考えたことをつなげたり，多面的･多角的に考察したりする活動を通して，近世の幹となるものを見出すことができる。

イ　展　開

学習活動（形態）	時間	○教師のはたらきかけ　•生徒の反応	○指導の工夫　◇評価
1　学習の目標を知る。　（一斉）	5	○時代の幹とはどんなものであったか。 •政治のあり方，人々の生活，時代や社会の変化すべてに関わるもの 学習問題：近世の幹を見付けよう	○幹がどのようなものであるか共通認識させるために，事前に古代や中世の幹を振り返っておいた。
2　4つの異なる視点から，各班員がまとめたことを伝え合い，つながりを考える。　（班）	12	○自分が担当した視点からまとめたことを伝え合い，4つの視点がどのようにつながっているのか考えよう。 A　武士の生活はどのようなものか。 B　農民の生活はどのようなものか。 C　中世と違い，幕府が強大な支配力をもったのはなぜか。（政治） D　中世の幹として考えた土地はどのように変化したか。（時代の転換点）	○自分のまとめたことが話合いに活かされていることが実感できるように，かつ，多面的・多角的な思考の助けとなるように，付せん紙やそれをつなぐ線を示したホワイトボードを活用して，各自がまとめたことのつながりを可視化させた。

		 **４つの視点からまとめた内容のつながりをホワイトボード上に可視化する**	○一人一人に責任をもたせるため，付せん紙と同じ色のペンを割り当て，ホワイトボードに書き込ませた。
3　時代の幹となるものが何かを話し合う。 ①　思いついたものをたくさん挙げる。 ②　①で出たものが４つの視点とつながっているか検証する。　（班）	15	○近世の幹は何だろう。 ①思いついたものを挙げてみよう ・米　・身分　・きまり ・幕府　・幕藩体制 ②挙がったものが４つの視点すべてとつながっているか，検証してみよう。 ・米は石高・年貢としてすべてにつながっている。 ・身分やきまりもつながっている。  **４つの視点のすべてとつながる近世の幹を見出す**	○意見を言いやすくするため，話合いの形式にはこだわらず，自由に意見を出させた。 ○幹を見出しやすくするために，①では自由に意見を出させて思考を広げ，②では４つの視点との関わりを検証させて思考を深めさせた。
4　班としての意見をまとめ，発表する。 （全体）	5	○班で見付けた幹を発表しよう。  **各班から出た幹を黒板に提示する**	米(4)・石高(3)・年貢(1)が８つの班 幕藩体制(1)・幕府(1)が２つの班
5　近世の幹が何であるか，自分の考えと理由を書く。　（個人）	5	○班や全体での話合いを踏まえて，自分が考える中世の幹は何だろう？そのように判断する理由も書いてみよう。	米・石高・年貢……８割 幕藩体制・幕府……２割

6　今後の学習の見通しをもつ。 （全体）	3	○自分が考えた幹は今後，近世のどんな事象と関わっていくと考えられるだろう。 • 江戸時代の文化 • 江戸幕府が滅亡する原因 • 社会の変化	◇多面的，多角的に考察して判断し，近世の幹が何であるかを書いている。 （思考・判断・表現） （ワークシート）

ウ　研究協議の内容

○ホワイトボードに線があったことは，一人一人のまとめがつながる仕組みになっていて，つながりが見えやすく，生徒がそれを活用して説明しようとしていた。

○一人一人が学習内容を整理してまとめていたが，そのつながりを本当に一人一人が理解していたかは疑問である。幹を見出すことも，できる子がいたからできたのであり，できない子のレベルは上がっていない。

○言葉のイメージ化ができない生徒には年表や資料を使ってイメージ化させる必要がある。

○各人一役を果たさせて，認識段階における自己意見の有用性を保障するものとなっているが，それを教師が意図しないときにでも自己有用性を感じ，他者も他者として尊重する状態にいかにステップアップさせていくのか。

○時代の幹が何を意味するのか，近世社会の確立・成熟期の幹を授業者がどのように考えているのかが分かりにくかった。

○生徒たちから出てくる「米を基盤とした経済」「幕藩体制の政治」というものと異なった観点から近世の幹を教師があえて提示して，クラス全体の議論を活性化することも考えられる。

○この授業では，一見，帰納的に生徒が考える計画がなされているが，生徒は演繹的な推論をして，近世の幹を決めている。帰納と演繹の往還や役割分担をどのように組織するかは次の時代の特色の学習でも課題になってくる。

(2)　近世のまとめの学習の実践

「幕府は強大な支配力をもっていたのに，なぜ改革が必要になったのだろうか」「なぜ，文化の担い手が町人になったのだろうか」という近世の幹と関わる問いをその後の学習に位置付けた。また，近世のまとめでは，「外国が来て開国しなければ，江戸幕府は続いていただろうか」という問いを設定し，自分の考えをまとめさせた後，近世の幹は何であると考えるか，最終ジャッジをさせ，その幹を通して見た近世とはどのような時代かを自分の言葉でまとめさせた。

米……○財政の中心が米で，武士が力をもっていたが，貨幣経済が広がり，貨幣を持っている町人の方が財力を持ち，力を持った時代。
　　○米を頼りに生活し，米がもとで一揆や打ちこわしが増加し，稲作が急激に発達した時代

金（貨幣）…○貨幣経済へと移っていき，商業も発展し，より物を高く売ろうとしたりするなかで，いろいろな発明とか文学・芸術も発展していったのではないか。

庶民（町人・農民）…○文化・経済ともに中心になっていて，政治の改革に対して，一揆や打ちこわしを起こしたりして近世の中心になっている。

法度……○法度によってすべてを統制されている時代。
身分……○実質権力者の交代が明確になった時代。武士が衰退し，結果町人に借金をし，町人が力をつけた。

米（→貨幣）・石高・年貢を幹とした生徒が約８割，その他が２～３名ずつであった。

幹を通して見た近世とはどのような時代かを書くように指示したが，大半の生徒がその幹を選んだ理由を書いてしまっていた。そのためか，自分のオリジナリティーのある言葉というよりは，教科書の言葉をつないだような文章が多く見られた。また，記述した内容が近世社会が確立した段階で幹を見出したときの記述と変化のないものも見られた。

一方で，幹自体を「米→貨幣」と書いたり，身分制度の崩れを図式化して示すなど，幹を通して近世の時代の脈略がわかる表現ができている生徒もいた。また感想では，貨幣が近代の幹とも深く関わってくるのではないかという予想を立てている生徒もいた。

４　研究の成果と課題

(1)　問題解決的な学習の充実について

(ア)　問いの設定の工夫
(イ)　思考の可視化の工夫

近世の幹を見出す活動を，近世社会が完全に確立した（徳川家光の政治までの学習を終えた）時点で実施した。豊臣秀吉の政治を学んだ時点でもすでに近世社会の基礎が形成されているためこの時点で幹を見出すことは可能ではあるが，過渡期であり，生徒自身に多様な面や角度から幹を見出させることは難しいと判断した。中世とは異なり，太平の世を築いた強大な支配力をもつ江戸幕府の政治のしくみやそのもとでの武士や農民の生活を学習した後，その学習内容を活用することで，過年度の中世での実践と比べると幹を見出しやすくなっていた。また，この時点ではじめて４つの視点を設定することができ，４つの視点のそれぞれのつながりや幹がどのような存在のものかを視覚的に理解させるために，ホワイトボード上に線を引いたり，つながりの中央に幹を示すカードを置いたりすることで，生徒の多面的・多角的な考察を促すことができた。

しかし，見出した幹がその後の社会的事象とどのように関わっているのかを考えさせながら，まとめにつなげたいと考えていたが，その後の文化や幕府政治の改革の学習では，すでに幕府の財政がゆらぎ，貨幣経済が普及し始め商人が財力をもつようになっている。つまり，生徒が見出した幹の在り方が当初と変容している。そのために社会的事象と幹との関係がうまくつながらなくなった生徒がいた。中には「米→貨幣」と書いた生徒のように，学習のまとめで幹の在り方が変化したことを捉えている生徒は比較的，動きのある表現でまとめることができていた。

各自が捉えた幹が学習のまとめまで活かされるような単元構成や問いを工夫していく必要がある。また，幹の在り方の変化に気付かせることが時代の特色を捉えることに有効ではないかと考えられるので，研究を続けていきたい。

(2)　生徒どうしの学び合いの充実（「協働」的な学びの充実）について

(ア)　新たな考えを生み出す追究形態の工夫
(イ)　活動意欲や自己有用感を高める手立ての工夫

班員に別々の視点を割り当て，そのすべてとつながる幹を見出させたことで，「自分がいないと幹を探すことができないという責任感を感じた」「積極的にできた」「１人１人の意見が重視されるようになり，よい答えができた」「全員が話合いに参加できた」という記述が見られ，話合いを活性化する手立てとしては有効であったと考える。また，自己評価の「話合いの中で新

たな考えが生まれたか」という項目では，４段階評価の４が67.7%，３が25.8，２が6.5であった。社会的事象をつなげていく活動が中心の話合いよりは新たな考えを生み出すことができていた。しかし，「自分のまとめたことや考えは班で幹を見出すことに役だったか」という項目では，４が48.4%，３が51.6%であった。また，「社会のつながりが分かった」では４が42.0%，３が54.7%，２が3.2%であった。これらは，研究協議で指摘をいただいたように，できる子がいたからできたということであり，すべての生徒の自己有用感を高めるには至らなかった。

時代を特色づける幹を捉えることは，生徒にとって容易なことではなく，実際に難しかったと感想に書いた生徒は多かった。ただ，学力が低位の生徒も活動は楽しかったと回答しており，「長い年月を通した幹を考えるのは思ったより難しいことだと感じました。でもその幹を導くことができたときは達成感を感じました」と書いた生徒もいた。すべての生徒が，みんなでやって前よりも分かったと実感できる学び合いの場をつくっていきたい。

研究（その３）

社会が「分かる」社会科学習の展開

―歴史的分野「我が国の産業革命」の実践より―

（実践者）宮本　真人

１　研究テーマ設定の理由

「過去」のできごとを扱う歴史的分野の学習において，「現在」と「将来」の視点を軸にして論じられる「持続可能な社会」の形成に資するためには，生徒に「過去の事実の分析や解釈を通して現代の社会の特色を認識し，それを基に未来社会を予見し構想できる力」を育むことが重要だと考える。本研究ではこの力を「社会にふみだす知」とし，これを育成するため，次に掲げた学習の充実を図ることとした。

○歴史上の価値相対的な課題について思考・判断・表現することを通して，歴史の大きな動きや現代の社会の特色が「分かる」歴史的分野の学習

歴史とは，その時点・その場面ごとの人々の思考や判断に基づく行動の蓄積である。したがって，生徒にその時代に身を置かせ，当時の価値相対的な課題を主体的に思考・判断させることによって，当時の社会を理解させることができると考える。また，このような学習活動を積み重ねることにより，学習した知識が現代認識や未来構想に資するような活用性をもったものになるとともに，過去のできごとに対する理解や解釈に基づく，未来に向けた社会的判断力が育つことにつながると考え，本研究テーマを設定した。このことを具現化するために，本研究紀要P13に記載の「『育てる』から『育つ』の指導観の転換」「自尊感情の醸成と『きょうどう』精神を発揮する学び」を念頭に，次の点を「研究の内容と方法」とし研究実践を進めた。

(1)　問題解決的な学習の充実
　ア　各時代の特色への理解や現代認識，及び，未来構想に活きる学習内容の研究・吟味
　イ　主体的に追究し，知識や概念を転移性のあるものに拡大する学習指導方法の工夫
(2)　生徒どうしの学び合いの充実（「協同」的な学びの充実）
　ア　すべての生徒が学び合える効果的な学習形態の工夫
　イ　他者からの学びを促進する手立ての工夫

以上のように本研究実践は，生徒の確かな社会認識を形成するとともに，未来構想に資する社会的判断力を育成するために，生徒が協同して課題を追究する学習活動をいかに展開するかを明らかにするものである。

２　研究の実際

(1)　本実践と研究テーマとの関わり

本実践は，次の目標，指導計画で構成された単元「帝国日本の拡大」（全８時間）の６時間目に当たる。

単元目標

観　点	目　　標
社会的事象への関心・意欲・態度	我が国の国際的地位の向上，近代産業の発展と近代文化の形成について関心をもち，単元を貫く学習問題「帝国主義の時代に，我が国はいかにして欧米と肩を並べたか」を意欲的に追究できる。

社会的な 思考・判断・表現	日清・日露戦争，条約改正，我が国の産業革命，この時期の国民生活の変化や近代文化の形成について資料をもとに多面的・多角的に考察し，公正に判断して，その過程や成果を適切に表現することができる。
資料活用の技能	この時期の我が国と諸外国との関係のあらまし，我が国で近代産業が発達し，社会が大きく変化したこと，近代文化の特色を捉えるのに適した資料を選択して，読み取ったり，図表などにまとめたりすることができる。
社会的事象についての知識・理解	我が国の国際的地位が向上したことや近代産業が発達し近代文化が形成されたことを理解し，その知識を身に付ける。

指導計画（全８時間）

次	学習内容	◇評価規準（観点）	時間
1	○欧米列強の侵略と条約改正 ○日清戦争 ○日露戦争 ○韓国と中国	◇条約改正に至るまでの過程について，人々の努力があったことを国際情勢と関連させながら関心をもって意欲的に追究しようとしている。（関心・意欲・態度） ◇日清・日露戦争の原因と結果を前後の国内外の情勢と関連付けて説明している。（知識・理解） ◇日本を取り巻く当時の国際情勢について，資料から読み取ったことをもとにまとめている。（資料活用）	4
2	○産業革命の進展 ○産業革命の光と影（本実践）	◇産業革命で人々の生活が変化したことに関心をもつとともに労働問題や社会問題が発生している点にも気付き意欲的に追究している。（関心・意欲・態度） ◇当時の社会問題への取組について，人々の行動と政府の動きを資料をもとに多面的・多角的に追究し，公正に判断し，自分の立場を理由を挙げて説明している。（思考･判断･表現）	2
3	○近代文化の形成	◇近代の芸術作品・文学作品の代表例について明治時代の特色と関連付けて表にまとめている。（資料活用）	1
4	○単元のまとめ	◇我が国の国際的地位が向上したことや我が国で近代産業が発展し近代文化が形成されたことを，歴史的事象に基づいて解釈して記述している。（知識・理解）	1

単元「帝国日本の拡大」で主に取り扱う19世紀後半から20世紀初頭までの時期は，我が国が「近代国家」として独立するために，ひたすら近代化にまい進し，「後進国」から欧米と肩を並べる「一等国」への道のりを歩み始めた時期だと言える。しかし，急速な近代化による軍事力や経済力の発展のかげには，大陸の国々に対する侵略と過酷な条件のもとで我が国の経済を支え続けた労働者の姿や重大な社会問題の発生があった。こうした状況で，様々な立場から「日本はどこに向かうべきか」が主張された。2011年３月11日－それは原発に象徴される巨大技術に依存した文明のありように，根底から疑問を投げかけた。日本はどこに向かうべきか－３・11以降，多くの人がこの問いに向き合っている。文明の転換点に立った今を生きる生徒に，日本人が欧米近代文明と向き合い，岐路に立ち，思索し進んだこの時期の我が国の動きを捉えさせることは，当時の社会を理解させるのみならず，現代の社会の特色を理解すること，及び，未来に向けた社会構想や社会的判断力の育成につながると考えた。

これを具現化するため，本単元では，当時の国際情勢等に身を置いて明治日本の社会状況を捉えさせることをねらいに，単元を貫く学習問題「帝国主義の時代に，我が国はいかにして欧米と肩を並べたのか」を追究させ，毎次ごとに思考･判断したことを自分の言葉で表現させていった。とりわけ，本実践では主な教材として「足尾銅山鉱毒事件」を取り上げ，持続可能な社会の基本的な課題である環境問題に関わる価値相対的な課題について思考・判断・表現させる学習を構成した。

(2) 生徒について

本実践対象学級の生徒（40名）はこれより前に学習した単元「明治維新」において，近代国家の基礎が整えられ，我が国が立憲制の国家となり，議会政治を始めたことを理解した。「明治維新」学習後の問い「『新しい日本の建設』を進めるためにさらに何が必要か」（複数回答）では，32名が不平等条約の改正，殖産興業の推進，富国強兵政策の強化など「欧米列強と肩を並べる努力」の旨を回答し，これらの生徒は，複雑な国際情勢の中で明治維新によって近代国家の基礎が整えられたことの意味や意義を捉えることができていると評価できた（前単元の学習評価から分析）。参政権の拡大，国民のための政治，など「世論を重視した政治」の旨を回答した８名及び「争いをなくす」の旨を回答した３名は，前単元の学習のねらいを達成した上で，明治政府が断行した諸改革における課題の面を重視していた。これらの生徒については，本単元「帝国日本の拡大」において扱う，我が国の帝国主義の動きや軍事力の強化，労働問題や社会問題の発生等について，当時の国際情勢や価値観を踏まえた十分な思考を伴うことなしに明治政府の動きを否定的に捉えることがないよう留意した。本実践の学習課題が，すべての生徒にとって歴史に身を置いて主体的に追究できる「当時の価値相対的な課題」となり得るよう工夫することが大切であると考えた。

(3) 指導の工夫について

上記のような生徒の実態を踏まえ，「現代の社会の特色への理解」や「未来に向けた社会構想ができる力」につながるよう，「生徒が育つ学び」「自尊感情の醸成」「『協同』的な学び」をキーワードに，次のように指導の工夫を設定した。

ア　問題解決的な学習の充実

(ア) 各時代の特色への理解や現代認識，及び，未来構想に活きる学習内容の研究吟味

田中正造は，議会で何年にもわたって足尾銅山の鉱毒問題を訴え続けた。ところがこれに対して明治政府は最後まで妥当な策を講じようとはしなかった。教科書の記述や授業の場面ではこのことをもって田中の正義感ぶりや政府の不誠実さを鼓吹して終わりがちだったりする。しかし，こうした取扱いは歴史ないし社会科の授業としては不十分なものだと言わざるを得ない。そこで，本実践では，足尾銅山鉱毒事件に係り，深刻な事態を前にしても，明治政府が適切な手を打とうとしなかったところに着目し，この事件を国家規模での産業発展という歴史の太い軸に関わる政府や企業，住民あいまっての社会的判断の教材として捉え直した。国の産業発展を支える銅の生産と深刻な状況を見せる地域環境の保全，果たしてどちらを優先すべきなのか，もし自分が当時に生きていたならばどちらの方策をとるか，そしてその根拠をどう説明するか。本教材は，生徒に葛藤を覚えさせながら切実な次元での社会的判断を求める教材として位置付け，開発した。

(イ) 主体的に追究し，知識や概念を転移性のあるものに拡大する学習指導方法の工夫

本主題での学習が「過去を学ぶことで現代の社会が理解でき，未来社会の構想が促される学習」となるよう，本時で扱う歴史と結び付く「現代の社会的事象」を取り上げるとともに当時の社会状況をより明確に捉えさせるために愛媛県に関する資料「別子銅山の煙害」を活用した。これにより生徒が「自分ごと」（P15）として主体的に教材や問いと向き合えると考えた。また，問いや学習展開については，「教えて考えさせる授業」（市川伸一氏）で提唱される学習過程を参考にし，当時の社会の状況を捉えるための問い①（理解確認課題）と当時の明治政府の政策を思考・判断する問い②（理解深化課題）の二つの問いを柱に授業を構成した。

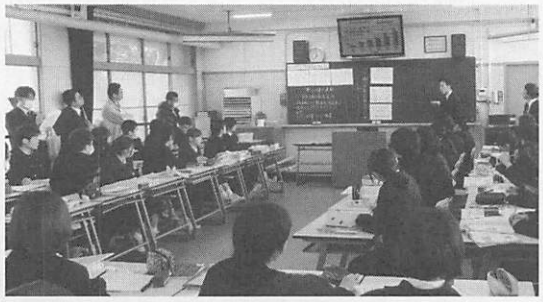
問い①：「なぜ，鉱毒問題が発生していたにも関わらず，政府は産業を優先する政策をとったのだろうか」（理解確認課題）
問い②：「あなたが当時に生きているとしたら，『銅の生産』と『地域環境の保全』どちらを優先させるか」（理解深化課題）

問い①はいわば当時の社会状況の理解を確認するための問いであり，問い②は問い①を通して，理解したことを活用し，深化させるための問いである。問い①によりすべての生徒に基礎的・基本的な知識や概念を習得させ，問い②の追究の中でそれを活用して，思考・判断・表現することを通して，習得した知識や概念が転移性のあるものに「育つ」と考えた。また，本時の終末場面においても，授業で習得した知識や概念を使わざるを得ない問いについてさらに思考させ，本時の学びを振り返らせることにより，その「育ち」を促進させようと考えた。

イ　生徒どうしの学び合いの充実

(ア)　すべての生徒が学び合える効果的な学習形態の工夫

生徒が互いに顔を見合いながら，また，それぞれの思考の状況を確認し合いながら学習が進められるよう，授業の前半部はコの字型の座席配置による全体学習を中心に進めた。その際，適宜ペア学習を取り入れ，互いの意見を聞き合いながらペアの考えを練り合い，発表する場面を設けた。授業の後半部では，問い②について，グループで練り合い高め合う場面を設けた。各自の考えを基にしてグループ学習を進めさせることにより，すべての生徒が各自の考えを広げたり深めたりできると考えた。以上のように問いや学習場面に応じて効果的に生徒相互が学び合えるよう，学習形態を工夫した。



コの字型の座席配置

コの字型の座席配置やペア及びグループ学習の最大の利点は，言語情報のみならず非言語情報（表情やしぐさなど）をも，互いにリアルタイムで確認し合いながら生徒の学び合いがなされる点にある。自分の思考・判断の過程や成果が，他者にどのように伝わっているのかをリアルタイムで認識できる状況での学びこそが，「協同」及び「自尊感情を醸成し合う」学びには欠かせないものであると考える。

(イ)　他者からの学びを促進する手立ての工夫

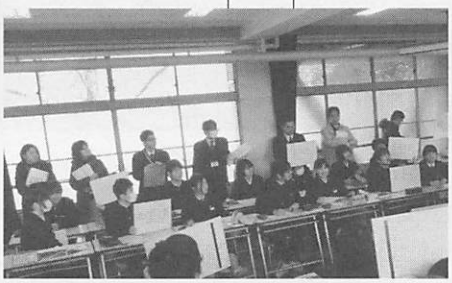
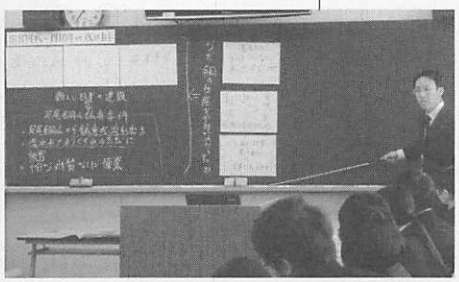
学級全体で話し合う場面では，色分けした意見カードやホワイトボードを活用して，個人やペアでまとめた意見を，適宜全体に提示させながら学習を進めた。これにより，時間を多くかけずに，多様な考えに触れさせることができ，「協同」の学びが促進されると考えたからである。また，学習活動２・４（次ページ参考）での生徒の追究成果は，本時のみならず本単元全体に関わる中心概念であるため，生徒の書いたホワイトボードをそのまま板書等に活用するなど，繰り返し使用した。自分たちの学習成果が教師や他者によって活用され続けることは，自己有用感の醸成に資すると考えている。また，問い①・②についての各自の考えは，ワークシートに書かせた後に，ペアや小集団学習の際に，根拠を示しながら発表させるようにした。他者との異同がより明確になり，各自の考えの根拠を互いに吟味し合い，そのことにより，学び合いが促進させると考えたからである。

3　授業の実際

(1) **主　題**　　我が国の産業革命を捉えよう

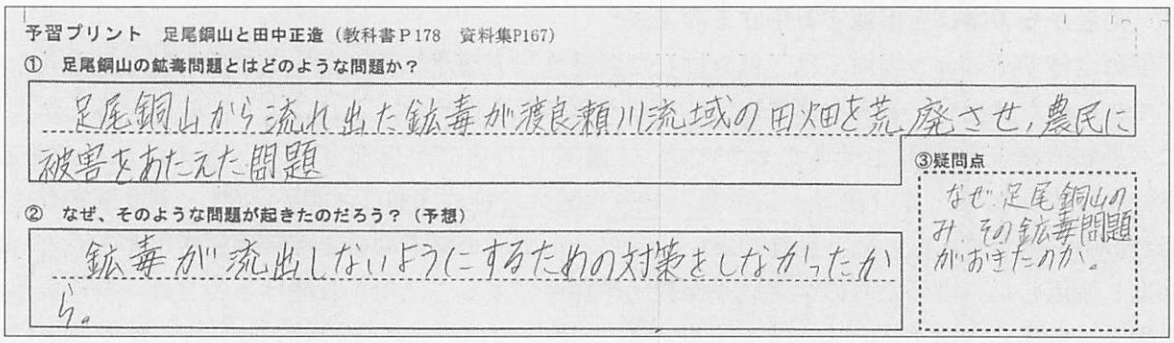
(2) **ねらい**　　我が国の産業革命が人々の犠牲を伴っていたことを理解する。

学習活動（形態）	時間	○教師の働きかけ　•生徒の反応	○指導の工夫
1　現代社会における「対立」を知る。 （一斉）	3	○名護市長選や東京都知事選での争点は何だろう。 • 町再興か，美しい海か（市長選） • 原発か，脱原発か（都知事選）	○歴史を学ぶ意味を感じさせるため，本時の学習内容と結び付く現代の社会的事象を取り上げた。
2　1900年前後の我が国の社会像についての教師の説明を聞く。 （一斉）	5	○当時の我が国の社会状況を語るキーワードは何だろう。 • 日清戦争　• 日露戦争 • 産業革命　• 帝国主義 など	○ホワイトボードやコの字型の座席の利点を活かして，すべての生徒の時代認識を効率的に確認しできるようにした。 ○生徒の記入したホワイトボードをそのまま板書に活用し，自己有用感を高める一助とした。 （学習活動４も同様）

ホワイトボードによる思考・判断の共有と板書への活用

3　足尾銅山鉱毒事件の概要を確認する。 （一斉）	5	○なぜ，足尾銅山鉱毒事件は起きたのだろう。 • 政府が十分な対策を取らずに銅の採掘を進めたから	○鉱毒被害への政府の対応に関して疑問や予想をもたせるため，足尾銅山鉱毒事件について予習をさせておいた。



予習プリント　足尾銅山と田中正造（教科書Ｐ178　資料集P167）

① 足尾銅山の鉱毒問題とはどのような問題か？

足尾銅山から流れ出た鉱毒が渡良瀬川流域の田畑を荒廃させ，農民に被害をあたえた問題

② なぜ、そのような問題が起きたのだろう？（予想）

鉱毒が流出しないようにするための対策をしなかったから。

③疑問点

なぜ、足尾銅山のみ、その鉱毒問題がおきたのか。

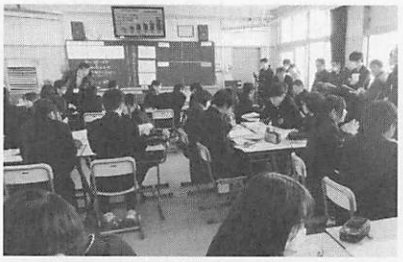
予習プリント

問い① 理解確認課題	なぜ，鉱毒問題が発生していたにも関わらず，政府は産業を優先する政策をとったのだろうか

4　問い①について資料をもとに考察する。 （個人） →（ペア） →（全体）	10	○政府が産業を優先させたのは… • 銅の輸出が日本経済を支えていたから。 • 重工業化を進め，先進国化する必要があったから。	○明治政府の対応をより明確に把握させるため，別子銅山の煙害をさらに取り上げた後，問い①について考察させた。 ○ペアで話し合った結果は，ホワイトボードに記述させ，板書に活用した。

問い② 理解深化課題	あなたが当時に生きているとしたら， 「銅の生産」と「地域環境の保全」どちらを優先させるか

5　問い②について判断したことをもとに話し合い，当時の社会の在り方を考える。 （個人） ↓ （小集団） ↓ （全体）	22	○あなたなら… 〈銅の生産を優先する〉 • 欧米に対抗するためには，工業力も経済力も上げなければならないから • 当時の日本は軍事力を強化しなければならず，銅はそのための貴重な資金源だから 〈環境の保全を優先する〉 • 多くの被害が出て，それが深刻な状況だから • 明治政府の進める開発は地域ひいては国を滅ぼすようなやり方だから	○個人の意見を反映させながら小集団での学び合いを充実させるため，意見カード等を活用し，各自の判断を可視化できるようにした。



小集団学習の様子

○生徒からより多様な考えを引き出すため，「やや○○を優先する」との立場を含め判断させた。

あなたが当時に生きていたとしたら・・・

絶対に銅の生産　｜　やや銅を優先　｜　やや環境を優先　｜　絶対に環境

（理由）

環境が悪くなれば、漁獲高の減少や水質の低下など産業革命の促進に大きく影響を与えてしまう。
けれど、ここで産業革命が終わってしまうと、日本の経済の発展や外国との対等な立場を築くということが遠のいてしまうため。お金をもうけるとその分環境への配慮に資金が回るのではないか。

あなたが当時に生きていたとしたら・・・

絶対に銅の生産　｜　やや銅を優先　｜　やや環境を優先　｜　絶対に環境

（理由）

銅の輸出は日本にとってとても大事なことだが、環境が悪くなり、人にも被害を与えるようになってしまうのなら、銅の生産はやめた方が良いと思う。それに、作物が育たなくなる。

学習活動５におけるワークシート

6　本時の学びを振り返る。 （個人）	5	○田中正造の言葉等を踏まえ，これからの社会はどうあるべきか考えよう。	○本時の学びが現代の社会への理解につながるよう，振り返りの問いを工夫した。

【田中正造の言葉】真の文明は山を荒さず　川を荒さず　村を破らず　人を殺さざるべし
【捨蔵さんの言葉】銅山と地下鉄の開発は同じようなもの。結局は自然を壊し，人を危険な目に合わせるかもしれない。しかし…「　　」
（ＮＨＫ連続テレビ小説「ごちそうさん」より）
【振り返りの問い】谷中村を追われた捨蔵さんは，何と言ったのだろう。

【学習のまとめ】銅山も地下鉄の開発も同じようなもの　結局は自然を壊し人を危険な目に合わせるかもしれない。しかし・・・

日本は今、環境より優先させてでも発展しなければ、国自体がほろびてしまうかもしれない。→いつかはやらないといけない。

学習活動６でのワークシート

4　成果と課題

(1)　問題解決的な学習の充実

ア　授業参観者より

○田中正造の生き方にもっと迫まってもよかったとの意見もあったが，小学校や道徳の時間での学習内容や中学校社会科歴史的分野の目標を踏まえると，本時のように「人物を通して時代像が分かるようにした」教材開発は大変参考になった。

○当時の時代像に対する理解が深まっていった様子が，生徒の授業中の発言内容から判断できた。「教えて考えさせる」授業展開が効果的になされたことによるものだと考える。

○問い②についての判断において「やや銅を優先」「やや環境を優先」の項目があったことが効果的であったと思う。これにより，生徒の判断基準を含む多様な考えが引き出せていた。

○最後の問いに魅力を感じた。テレビドラマからの引用というフィクションではあるが，本時の学びを生徒が振り返り，さらにそれを活用して思考し，自らの思いを語ることのできる問いであった。

●本実践は「足尾銅山鉱毒事件」を主たる教材として扱い，「別子銅山」を副材として扱ったが，その教材の位置付けを逆にして「別子銅山」を中心的に扱ったほうがよかったのではないだろうか。そうすることにより，授業者が意図としている「主体的に教材や問いに向き合える」授業展開が，さらに具現化できたのではないかと考える。別子銅山の資料と向き合っている時の生徒のまなざしが印象的であった。

イ　生徒アンケートより（以下の数値は生徒40名の平均値を示す。５段階評価，最高値５）

項目①自ら意欲をもって積極的に学んだ（4.72）
項目②とても興味を引く教材であった（4.57）
項目③日本の産業革命が進められた時代の様子がだいたい分かった（4.65）
項目④今日の学習から，今後の私の生き方や私たちの社会に活かすべきことが見いだせた（4.46）
※項目①～④において評価を「２」以下とした生徒はいなかった。

ウ　考　察

授業参観者の意見，生徒アンケート及びワークシートの記述から，「当時の社会が分かる授業展開」「未来社会を構想できる力の育成」を具現化することついては，本実践で設定した指導の工夫には一定の効果があったと判断する。「すべての生徒が伸びる」という観点からも同様のことが言えると判断している。本実践の成果と課題を踏まえ，以下の課題を今後研究実践していく。

未来構想に資する社会的判断力と我が国の歴史に対する愛情とがともに育つ単元開発及び指導の工夫の設定

本実践は，当時の価値相対的な課題についての政府判断を生徒が評価する学習内容である。これにより，よりよい未来構想に資する社会的判断力が育成されると考えたが，ともすればそれは，我が国の歴史上でなされた政治的な判断を安易に否定することにつながる恐れがある。そのため，本実践では当時の世界情勢を踏まえた日本の立ち位置を認識させるために，学習活動２及び問い①の追究を丁寧に扱う一方で，当時の政府の判断について感情的な面のみから否定することがないように，田中正造や谷中村を追われた人々の思いを捉えるような学習活動の工夫はほとんど設定しなかった。しかし，そのため問い②の判断及び振返りの問いの思考場面が，「葛藤」を伴うような場面になり得なかった生徒がいるのではないかと感じている（学習中の観察による）。当時の課題を歴史に身を置いて捉えさせるためには「葛藤」を覚えるような判断を迫る必要があり，また，それは，持続可能な社会のための教育の焦点とされる「自己抑制力」（国立教育政策研究

所基礎研究部長　角屋重樹氏）の育成にも資することができると考える。本時でいえば，明治政府の立場でありながら，「谷中村の人々の命に思いを馳せ，葛藤を伴いながら銅の採掘に関わった人物の思い」を授業で取り扱えば良かったのではないかと考えている。授業参観者からの助言にもあった地域教材の活用も含め，深い教材研究を進めなければならないことを実感している。

(2) 生徒どうしの学び合いの充実（「協同」的な学びの充実）

ア　授業参観者より

○ホワイトボードが効果的に活用されていた。特に黒板に生徒が書いたものをそのまま使ったことは，学習意欲や自己有用感につながる工夫であると感じた。

○ペア活動やグループ学習が効果的になされていた。それぞれの問いの質に応じた学習形態により，効果的に学び合いが進められていた。

○生徒どうしの息づかいがリアルに感じられる形態での学び合いは，授業者が意図する「協同」の学びには不可欠であることが生徒の姿から実感することができた。

●授業者自身も生徒の息づかいやつぶやきを上手く授業の中で活かしながら授業を展開すれば「協同」の学びがさらに促進されたのではないか。例えば，友達の発表に対して「なるほど」とつぶやいた生徒に，「どういったところが『なるほど』なの？」の問いかけをすることなどである。

●個人→ペア→小集団での考えのつながりはあり，そこでの「協同」の学びは大変効果的になされていた。しかし，それをクラス全体で練り合う場面における板書の工夫がさらに必要である。それにより，各生徒の判断基準の微妙な違いがより明確になり，生徒が価値観の多様性をもっと実感しながら，自らの学びを広げたり深めたりすることになったと考える。

イ　考　察

コの字型の学習形態や小集団での学習は，生徒から「できるだけ多く設定してほしい」との要望が強い。また，本実践での生徒の学習状況やアンケートの回答結果（本実践での小集団の学習において自己有用感を実感した生徒が87％）から，本時で設定した小集団での学び合いの場面における指導の工夫の有効性は確認できた。今後は，それをさらに充実させるために，次のことを研究実践していきたい。

○小集団での学習をより充実させるための，学習過程の工夫改善 ○生徒どうしの関わり合いを密にする教師のコーディネートや板書の工夫

本実践を踏まえ，小集団で「協同」して学ぶ際の重要なポイントを明らかにすることができた。それは，「個人で十分な思考をし，自分なりの判断をした後では，友達との関わり合いの場面において，社会的な見方や考え方は広がり深まりにくい」ということである。この点を踏まえ小集団活動を効果的に行うことができる，その前後の個人での思考・判断場面をどのように構成するかについて，今後研究を積み重ねていきたい。また，学級全体で追究成果を練り合い高め合う場面においても，生徒どうしが関わり合いを密にしながら，さらに学びを深めていくことができるよう，教師がいかに生徒の発言をコーディネートしていくかや板書等についてさらに工夫し，「すべての生徒が伸びる」を高いレベルで具現化していきたいと考える。

本校の研究主題を具現化するためには，生徒どうしの学び合いを充実させることは必要不可欠である。ＯＥＣＤの動向や我が国での次期学習指導要領に向けての議論を踏まえて「これから必要な学力」を考えたとき，様々な考えの人々と協力して問題解決を図る学習の積み重ねは，今後ますます重要になってくるであろう。さらに研鑽したい。

参考文献
小松　裕（2009）「全集　日本の歴史　第14巻『いのち』と帝国日本」小学館
中尾敏朗（2011）「持続可能な社会とこれからの歴史学習―現代の社会がわかる歴史学習に向けて―」日本社会科教育学会『社会科教育研究』P21-28
市川伸一（2012）「教えて考えさせる授業 中学校」図書文化
佐藤　学（2012）「学校見聞録　学びの共同体の実践」小学館
ＮＨＫ取材班（2012）「日本人は何を考えてきたのか　明治編　文明の扉を開く」ＮＨＫ出版

第３章　おわりに

今年度も昨年度に引き続き，地理的分野と歴史的分野において，生徒どうしの学び合いによって，社会的な見方や考え方をさらに広く，深く成長させ，自信をもって社会にふみだすことのできる生徒を育てるべく，研究・実践を進めてきた。今年度は特に，身に付けた知識，理解，概念等を生徒が活用し，生徒自身がもっている力を引き出して問題解決に至ることができるような学習展開を工夫し，自尊感情の醸成に資する生徒どうしの学び合いの充実を図った。次のような成果と課題を次年度の研究の礎としたい。

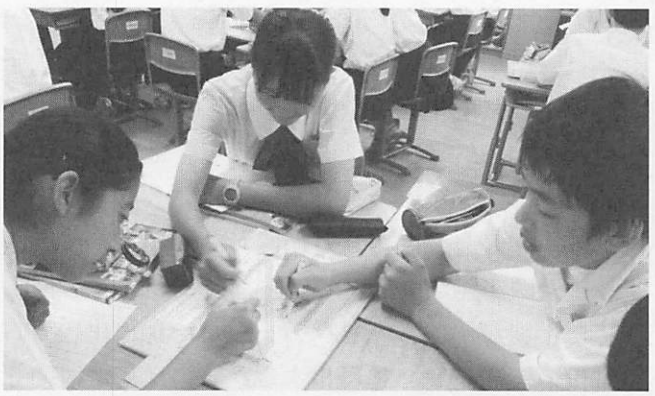
１　問題解決的な学習の充実

研究（その１）では「アマゾンの開発は進めるべきか，環境保全に努めるべきか」，研究（その３）では「銅の生産と地域環境の保全どちらを優先させるか」という価値相対的な課題を生徒に突き付け，甲乙つけがたい社会的判断を求めた。研究（その２）では「近世の幹を見付けよう」という，一面的に考えただけではたどり着けない，生徒が少し難しいなと思うようなレベルの問いを設定した。この結果，生徒はそれまでの学習で身に付けた知識や概念，また他者の学びを活用して，自らの考えを構築することができた。また，追究の過程において，社会的事象どうしの関わりや他者の学びとのつながりを可視化することは，多面的・多角的な考察・判断を促すことに有効であることが改めて分かった。

身に付けた「基礎・基本」が，授業のみならず，あらゆる場で自由自在に活用でき，将来にわたって発揮していくことができるものにするためにも，さらに指導の在り方を工夫していきたい。

２　生徒どうしの学び合いの充実

小集団での活動において，一人一人に役割を割り当てることで，生徒は自分の学びが問題解決に必要であるという自覚と責任感をもち，学習意欲の喚起や話合いの活性化につながった。また，互いの学習成果を重ね合わせたり，つながりを可視化するためにツールを工夫をしたりしたことは，思考の助けとなるだけでなく，自分の学びが仲間のためになり，自分も仲間の学びに支えられていることを実感させる手立てともなった。しかし，すべての生徒が自己有用感を感じるまでには至っていないので，さらに質の高い学び合いの場を設定し，一人一人の生徒が自らを活かせる場を保障していく必要がある。



学び合う生徒の様子